第20回 渋谷の午後のコンサート。

2023.11.5(日) 14:00開演　Bunkamura **オーチャードホール**

Sun. Nov. 5, 2023, 14:00 at Bunkamura Orchard Hall

第32回 平日の午後のコンサート。

2023.11.6(月) 14:00開演　東京オペラシティ コンサートホール

Mon. Nov. 6, 2023, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

〈なんでもOKストラ!!〉 〈Anything "OKstra"!〉

指揮とお話　円光寺雅彦　Masahiko Enkoji, conductor & speaker

ピアノ　清塚信也* Shinya Kiyozuka, piano

コンサートマスター 依田真宣　Masanobu Yoda, concertmaster

グリンカ：歌劇『ルスランとリュドミュラ』序曲(約6分)
Glinka: Overture to opera "Ruslan and Lyudmila"　(ca. 6 min)

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番より第2楽章* (約12分)
Rachmaninov: 2nd movement from Piano concerto No. 2　(ca. 12 min)

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第5番『皇帝』より第3楽章* (約10分)
Beethoven: 3rd movemnet from Piano concerto No. 5 "Emperor"　(ca. 10 min)

— 休憩 intermission —

チャイコフスキー：『くるみ割り人形』より"金平糖の踊り" (約2分)
Tchaikovsky: Dance of the Sugar Plum Fairy from ballet The Nutcracker　(ca. 2 min)

ラヴェル：ボレロ(約17分)
Ravel: Bolero　(ca. 17 min)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 / Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra
協力：Bunkamura (11/5) / In Association with Bunkamura (Nov. 5)

◎すべてのお客様に、快適にお楽しみいただくために / Dear audience

♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

♪All seats are reserved. Late admittance will be refused during the live performance. If you enter or reenter just before the concert or between movements, we may escort you to a seat different from the one to which you were originally assigned.♪Exiting during the performance will be tolerated. If you do not feel well, please exit or enter as you need. However, please mind the other listeners so that they will be minimally disturbed.♪Please refrain from using your cellphone or other electronic devices during performance.♪Please cherish the "afterglow" at the end of each piece for a moment before your applause.

出演者プロフィール

指揮とお話　円光寺雅彦
Masahiko Enkoji, conductor & speaker

©Takafumi Ueno

桐朋学園大学指揮科卒業。指揮を斎藤秀雄氏、ピアノを井口愛子氏に師事。1980年ウィーン国立音楽大学に留学しオトマール・スウィトナー氏に師事。これまでに東京フィル指揮者、仙台フィル常任指揮者、札幌交響楽団正指揮者、名古屋フィル正指揮者などを務め、数多くの公演を共にしながらオーケストラの飛躍的な発展に貢献してきた。N響、読響、新日本フィル、東響、群響、大阪フィル、広響、九響をはじめとするほとんどの国内オーケストラ、海外ではプラハ響、BBCウェールズ響、ベルゲン・フィル、フランス・ブルターニュ管弦楽団に客演し、深い音楽性と的確な指揮で多くの聴衆を魅了。テレビ等の番組にも定期的に出演するなど、幅広い活躍を続けている。

ピアノ　清塚信也
Shinya Kiyozuka, piano

©Yuji Takeuchi

5歳よりクラシックピアノの英才教育を受ける。中村紘子、加藤伸佳、セルゲイ・ドレンスキーに師事。桐朋女子高等学校音楽科（共学）を首席で卒業、国内外のコンクールで数々の賞を受賞。人気ドラマ『のだめカンタービレ』他作品で吹き替え演奏を担当し脚光を浴びる。2013年には映画『さよならドビュッシー』で岬洋介役として俳優デビュー。2015年のドラマ『コウノドリ』（主演：綾野剛）ではピアノテーマおよび監修を手掛け、役者としても出演。知識とユーモアを交えた話術と繊細かつダイナミックな演奏で全国の聴衆を魅了し続け、年間100本以上の演奏活動を展開。ピアニストとして次々と新しいフィールドへの挑戦を続け、常に話題と注目を集めている。

プログラム・ノート

解説＝飯尾洋一

ピアノとオーケストラの華麗なる競演

本日演奏される曲はいずれも名曲中の名曲ばかり。大作曲家たちによるバラエティに富んだ傑作集を、円光寺雅彦指揮東京フィルと、大活躍中のピアニスト、清塚信也の演奏でお楽しみいただきます。

グリンカの歌劇『ルスランとリュドミュラ』序曲は小気味よく軽快。コンサートの幕開けにはぴったりです。ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番とベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番『皇帝』は、いずれも協奏曲の人気曲。ピアノとオーケストラが、ときには仲よく会話をするように、ときにはお互いが競いあうようにして、ひとつの音楽を作り上げます。ロマンティックなラフマニノフと、躍動感あふれるベートーヴェンの音楽が好対照をなします。

チャイコフスキーの「金平糖の踊り」と、ラヴェルの「ボレロ」では、楽器の音色にご注目を。さまざまな楽器の音色が駆使され、作品ごとに独自の世界が築かれます。多彩な音のパレットがオーケストラを聴く醍醐味を堪能させてくれることでしょう。

バラエティに富んだ名曲の数々を、マエストロ円光寺と清塚信也による軽妙なトークとともにお楽しみください

エネルギッシュでスピード感あふれる序曲

19世紀ロシア国民楽派の父と呼ばれる作曲家が**ミハイル・グリンカ**(1804-1857)。現在もっとも広く親しまれている曲は、この**歌劇『ルスランとリュドミュラ』序曲**でしょう。

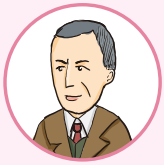
オペラの題材は文豪プーシキンの同名の長編詩です。舞台は古代ロシアのキエフ公国。キエフ大公の娘リュドミュラが悪魔によりさらわれますが、求婚者である騎士ルスランが数々の困難に打ち勝ちながらリュドミュラの救出に成功し、ふたりが結ばれるまでが描かれます。

当初、グリンカはプーシキンが自ら台本を書くことを望んでいましたが、プーシキンが決闘で受けた傷がもとで亡くなったため、台本はヴァレリアン・シルコフら数名の共作によって書かれることになりました。初演は1842年、サンクトペテルブルクにて。

序曲の冒頭は勢いよくさっそうと開始されます。ここではオペラの終幕で登場する祝祭的なテーマが用いられています。続いて登場するのは第2幕のルスランのアリアに由来する流麗でのびやかなテーマ。ふたつのテーマを軸にエネルギッシュでスピード感あふれる楽想がくりひろげられ、輝かしいコーダまで一気呵成に駆け抜けます。

「大頭」の怪物と相見える騎士ルスラン(第2幕第3場、ニコライ・ゲー作)

瞑想にふけるかのようなピアノの響き



セルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)はロシアで生まれ、後にアメリカに渡った作曲家兼ピアニスト。生前は大ピアニストとして人気を集めていました。大作曲家にはショパンやリストのように作曲家としてもピアニストとしても超一流だった音楽家がたくさんいます。20世紀

以降は分業化が進んで、このような二刀流の大作曲家は珍しくなりましたが、ラフマニノフはその最後のひとりといえるかもしれません。

自身が卓越したピアニストだけあって、ラフマニノフはピアノ曲の分野にたくさんの傑作を残しました。1901年に初演された**ピアノ協奏曲第2番**は代表作。その4年前に満を持して発表した交響曲第1番が初演で手厳しい酷評を浴びせられたことから、ラフマニノフは長期のスランプに陥っていました。しかし、音楽に造詣の深い精神科医ニコライ・ダーリの助けにより、ラフマニノフは自信と創作意欲を回復して、ピアノ協奏曲第2番を書きあげます。作曲者自身の独奏による初演は大成功を収めました。

本日演奏されるのは、全3楽章のなかから**第2楽章**のアダージョ・ソステヌート。オーケストラの柔和な響きに瞑想にふけるかのようなピアノ独奏が加わり、陰影に富んだ表情を描き出します。

高揚感あふれる華やかなフィナーレ

“皇帝”とはだれのことでしょうか。実はこの曲は特定の人物をモデルとしているわけではありません。作曲者**ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン**(1770-1827)が命名した題ではなく、後世に『皇帝』の愛称が定着したのです。

それにしても、『皇帝』という愛称は作品の勇壮な雰囲気をよく表しています。作曲は1808年末から1809年にかけて。当時、ウィーンの街は戦乱に巻き込まれていました。攻め込んだのはナポレオン率いるフランス軍です。ベートーヴェンの住居の近くにも砲弾が落ち、作曲家は地下室へ避難したとか。そう考えると、作品に戦時の勇ましいムードが漂っているのも納得できます。

ベートーヴェンも他の大作曲家同様、名ピアニストでした。したがって、ピアノ協奏曲第1番から第4番までは自分自身がピアノ独奏を務めて初演しています。ところが、**第5番『皇帝』**では、聴覚の衰えが進んだため、他人に演奏を任せることになりました。以後、ベートーヴェンはピアノ協奏曲の新作を書いていません。

本日演奏される**第3楽章**アレグロは、この協奏曲のフィナーレ。勢いよく駆け上がるような主題で開始され、ピアノとオーケストラが掛けあいをくりかえしながら、高揚感あふれるクライマックスへと突き進みます。

チェレスタのキラキラした音が導く夢の世界

ピョートル・チャイコフスキー(1840-1893)の**『くるみ割り人形』**は1892年、ペテルブルグで初演されました。クリスマスイブにくるみ割り人形をプレゼントされた少女クララが、夢の世界で王子さまとお菓子の国へと旅立つ物語が描かれます。

お菓子の国では金平糖の精がクララたちを歓待します。ここで活躍するのがチェレスタという鍵盤楽器。キラキラと輝くような音がします。当時、この楽器はまだ世の中で知られていませんでした。チャイコフスキーはパリでたまたまチェレスタを見つけ、「これだ！」とばかりに自作に使用することを思いついたのです。チャイコフスキーが楽譜出版商の友人にチェレスタの購入をお願いした際、「この楽器は私が最初に使うから、リムスキー=コルサコフやグラズノフら他の作曲家には絶対に見せないでほしい」と依頼したといいます。

チャイコフスキーの狙いはずばり的中。『くるみ割り人形』は大評判を呼び、やがて世界中の劇場やオーケストラがチェレスタを買い求めることになりました。

金平糖の精と王子（マリインスキー劇場での初演版第2幕）

静かな始まりから壮大なクライマックスへ

ボレロとはスペイン舞曲の一種。フランスの作曲家**モーリス・ラヴェル**(1875-1937)は「スペイン風のバレエ音楽を書いてほしい」という依頼を受けます。当初、ラヴェルはスペインの作曲家アルベニスのピアノ曲『イベリア』をオーケストレーションしようと考えていました。しかし、編曲権の問題からこれを断念し、代わりにオリジナルの曲を書かなければならなくなりました。初演まではわずか3週間。ラヴェルは「時間がないのだからごく単純な譜面を考えるしかない」と腹をくくります。そんな窮地から生まれた**「ボレロ」**は、作曲者の予想をはるかに超えて、生涯最大の成功作となりました。

曲の構造はシンプルです。冒頭から小太鼓がボレロのリズムを刻み続け、そこにエキゾチックなテーマが登場します。このテーマが次々と楽器を変えながらくりかえされるのが特徴。最初はフルートで、次はクラリネットで、さらにファゴットで……。珍しいトロンボーンのソロも登場します。楽器の種類や組合せをどんどん変えながら曲は次第に高潮し、やがて大きなクライマックスを築きます。

「シルペリック」でボレロを踊るマルセル・ランデール(ロートレック作)

いいお・よういち(音楽ジャーナリスト)／著書に『クラシック音楽のトリセツ』(SB新書)、『R40のクラシック』(廣済堂新書)、『マンガで教養 はじめてのクラシック』監修(朝日新聞出版)、『クラシックBOOK』(三笠書房)他。雑誌やウェブ、コンサート・プログラム等に幅広く執筆する。テレビ朝日「題名のない音楽会」他、放送でも活動。